

---

# 魔法少女リリカルなのは 魔法少女と転生者

シーザス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 魔法少女と転生者

### 【Nコード】

N8536Z

### 【作者名】

シーザス

### 【あらすじ】

気がついたら、真っ暗な空間にいた少年、『無蔵 聖』は神と出会う。

そして、転生した矢先、いきなり「双子座」と名のる双子に出会う。「星座」とは？ 彼らの目的は一体、なんなのか。

∴1∴

\* 「俺はなんでこんなところにいるんだ？」

俺は今、真っ暗な空間にいた。

何も無い。

「 、！！ 誰だ！」

俺は後ろを振り向きながら、構えをとった。

俺の構えは、両手を楽に握って下に下げ、右足を少し前に、左足を少し後ろにして構える。

そこにいたのは …、

\* 「おっと、キミだな？ 『陸奥圓明流』を使う子供ってのは？」

頭に白いわつかをつけた男だった。

\*「誰だよ…？ あんたは？ つてか、なんで『陸奥圓明流』を…？」

\*「まあ、立ち話もなんだ。座れよ。」

\*「おい、俺の話を見殺しするな。」

とか何とかいいつつ、ちゃっかり座ってる俺が情けない…

\*「んで、俺が誰か。だったな。まあ、世間的に、俺は神様って奴だな。」

\*「神…？ 残念だが、俺は神を信じないんでな。つうか信じたくない。」

神「あらあらそれは残念なこと。まあ、いいさ。」

\*「っ！！ てめえ…俺は何故、ここに…！！ 何故、貴様は俺を殺した…！！？ 知っている真実を全て話せ…！！！」

神「わかった。まず、お前は俺の部下の手違いによって死んだんだ。俺はお前を転生させる。」

\*「手違い…だと…!? てめえ!! デタラメならべてんじゃ…  
…!!!?」

俺は神に襲いかかろうとした。

しかし、俺の体は空中で止まった。

\*「な、なんだ…!!!?」

神「人の話は最後まで聞け。」

その時、俺の体につつすらと光る小さな糸が…いや、紐か?

\*「ワイヤーか?」

神「よく見えたな。だが、ワイヤーじゃない。」

\* 「ならなんだ？」

神 「？雲糸？だ。」

\* 「束になれば大の大人でも動けなくなる軽くて、それでいて丈夫な糸か。」

神 「知ってたか。」

\* 「いや、今知った。」

正直、今になってわかったが、そこらじゅうに張り巡らされてるな。

神 「お、よく気づいたな。」

\* 「人の心を読むな……」

神 「俺は神だからな。」

\* 「それで…さっき、俺を転生させるとかいつていたが、何処に転

生させるつもりだ?」

神「『魔法少女リリカルなのは』」

\*「は? ……………おいおいまさか、アニメの世界か……!?!?」

神「お、いい感じてんじゃねえか」

\*「つてつめえ!! やっぱり殺す!!」

神「その動けない状態で、どうやって俺を殺すつもりだ?」

\*「なめんなよ? 俺は『陸奥圓明流』を? 使える? だけだ。 継承はしてない!!」

神「…あ」

\*「バカが。」

神「いぎゃあああああああああ——!!——!!——!!」

\*「…わりい。 案外弱くて…」

神「うづう…」

俺の眼下にはボコボコになった神がいた。

神「酷い…最初はまだ良かった。 だが、最後は酷い…？ 虎砲？ からの？ 虎砲？ の跡に向けて？ 無空波？ は無い…体がいかれる…」

\*「…つてか、よく生きてるな。」

神「俺は神だからな。 ……つて何回目だ…？ このくだり…」

\*「ふむ。 やつとくだりに気がついたか。 そっいえば…俺は転生後、役目はなんなんだ？」

神「……………嗚呼、お前の役目は特に無い。」



\* 「特に無い、か…ふん、まあ、いいだろう。」

神「後、お前には『希少技能<sup>レアスキル</sup>』として？零<sup>ゼロ</sup>？を授ける。」

\* 「？零？…？？」

神「これについては、あつちに手紙を送る。」

\* 「わかった。」

神「さて…と、そろそろ時間だな。」

俺は自分の姿を見てみた。

自分の足が透けてきていた。

神「さて、お別れか。最後に、お前には『リミッター』をつけさせてもらうぞ。」

\* 「『リミッター』？何か関係あるのかよ？」

神「あつちの世界には魔力値というものがあつて、お前はそのままの状態、ランクがEXランクなんだ。だから、『リミッター』でランクをC＋ランクになつてもらふ。これは技の威力にも関係するからな。C＋だと、打撲程度の傷になるだろうから大丈夫だろう。」

\*「そこまで威力が落ちるのか。なら、大抵のことなら平気だな。」

神「大抵つてなんだよ。大抵つて…。」

\*「聞いたらあんた、生きてないぜ？」

神「はー…怖っ!!。」

\*「最後に…教えておくか。俺の名前は聖。セイ無蔵聖だ。ムゾウセイ。」

神「やっと、名前を覚えてくれたな。本当にこれで最後さ。お前の武器を作るから、リクエストをくれ。作っておくよ。」

聖「だったら、日本刀を作ってくれ。扱いやすいものならなんでもいい。」

神「お前、剣士だったのか。わかった。俺の最高傑作を作っておくよ。ああ、それから、お前の家は一軒家だ。あっちにいたら、家の前に送っておくよ。」

聖「わかった。助かる。」

そろそろ、体が消えてきた。

神「さて、と。そろそろ……」

聖「ああ、お別れだな。」

神「完成したら、お前の家に送るよ。」

聖「ああ、ありがとう。」

そして、俺は光になって消えた。

神「……………さあて。 頑張るとするかなあ。」

俺はあいつの注目の品を作り始めた。

聖「ここが、俺の家か。」

俺はかなりでかい家の前にいた。

聖「いやいや、絶対にでかいだろ…別荘か？ ここは…」

俺は呆れて家の中に入ろうとした。

その時、

\*「「ねえ…。 キミ、 『無蔵 聖』 だよね？」

聖「!!!? 誰だ!? 何故、俺の名前を…!!!?」

\* 「僕達は「双子座」だよ。」

\* 「僕はレミア」

\* 「僕はファンケル」

レミア、ファンケル「レミア・ファンケル」

聖「レミア・ファンケル…？ 誰なんだよお前らは…!!」

レミア「とりあえず、場所を移動しようか？」

ファンケル「この先に、人気の無い場所を知ってるからさ。」

聖「……………何が目的だ？」

レミア「キミの…？力？」

聖「(コイツら…)わかった…案内しろ。」

レミア、ファンケル「そこなくっちゃ」「

俺は双子についていった。

神「なにい！！？」  
「<sup>スター</sup>星座」共が牢獄から逃げ出したとお！！？」

天使「はい……！！？ 暗黒の牢獄？が、いつの間にか破壊され、  
「星座」達は逃げ出しておりました……！！」

神「くそっ……！（誰か密告者がいるのか……！？ それとも……）な  
んにしても、急がねえとな……！！ 待つてろよ！ 聖……！！」

俺は大急ぎで作業を再開した。

レミア、ファンケル「ここだよ。」「

聖「ここは…どう見ても公園じゃないか。」

レミア「そうだよ。」

ファンケル「ここは公園だよ。」

聖「…（そういえばあいつ、『リミッター』がなんなのか教えなかった…！くそつたれ…！！）うおおお…！」

俺は突っ込んだ。

レミア「へえ？ 突っ込んでくるんだ？」

そうだったレミアの右手に、真っ白な『大剣』が現れた。

聖「…！！？（どこから現れたんだ…！！？）ちいつ…！」

俺は後ろに跳んだ。

レミア「はあっ…！」

ゴヒュッ!!

『大剣』が地面をえぐり、地面が切れた。

ズバン!!

聖「あぶなっ… ツツツ!!?」

後ろからの殺気に気付き、直ぐにその場を離れた。

ドガガガガガ!!

銃弾が地面をえぐる。

ファンケル「惜しいな。」

聖「ファンケルは黒い『銃』か…くそっ!!」

レミアは『大剣』、ファンケルは『銃』か…



レミア「？覇斬？」

ファンケル「？ブラストバスター？」

レミアの『大剣』が赤い光を纏った。  
それを振り下ろした。

ファンケルの『銃』が青い光を纏った。  
それを放った。

聖「（踏み込むしかない……！！）」

ドガアアアアアアアン！！！！！！！！

濃い煙が立ち上がった。

聖「うおおお……！！」

煙の中から、俺はレミアとファンケルを奇襲した。

レミア、ファンケル」「！」「

聖「？三日月？！……！」

俺の両足は弧を描き、レミアとファンケルを蹴り跳ばした。

ドガガガ！……！

レミア、ファンケル「うわあああ！……！」

ドガアアアアアン！……！

二人は地面に叩きつけられた。

聖「はあっ……！ はあっ……！ ぐっ……左腕がいかれちまっ……！！……！」

正直、今のままだと確実に腕が壊れる。

レミア「フッフッフ……」

ファンケル「惜しかったね。」

聖「なっ…!!!?!」

ぼろぼろになりながら、二人は平然と立っていた。

聖「嘘…だろ…?」

レミア、ファンケル「さようなら。 『無蔵 聖』」

レミアとファンケルの武器が俺に向けられた。

聖「まだだ…まだ、終わらない…!!!」

だが、もう体に力が入らない。

そして

ガキーン!!!

\*「悪いな、聖。お前と「星座」を戦わせてしまって。だが、安心しろ。俺が来たからには、もうお前には傷一つ付けません！」

それは、

聖「か、み？」

神だった。

神「立ち上がれ。」

そういつて神は俺に『日本刀』を差し出してきた。

…2…

聖「神…これは…」

神「俺の最高傑作の刀さ。」

聖「神…ありがとう。」

神「礼はいいさ。それより、集中しろ。コイツらは強いぞ。」

聖「嗚呼…」

レミア「ちえっ！ また僕達を捕まえに来たのかい？」

ファンケル「ご苦勞なことだね。」

レミア、ファンケル「今日はおおさらばにしてあげよう。  
また会おうね。」無蔵 聖「

双子は空に浮かんで消えた。

聖「まで…」

ズキン！！！！

聖「~~~~~！！！！！！」

左腕の激痛で意識が跳びかけた。

神「腕か？ 見せてみる。」

聖「いつ！！！！」

少し触られただけでこの痛み…砕けたか…？

神「…これは酷いな。完全に砕けてる…一旦、お前の家に行こう。」

聖「…すまねえ…」

俺は神の肩を借りて歩いた。

聖「つてえ!!!」

神「ほれ、我慢しろ。」

聖「~~~~~っ…!!! マジでいてえ…」

神「とりあえず、固定はさせてもらったがまだ不安定だ。しばらくは病院に通ったほうがいいな。」

聖「そうする…」

神「嗚呼。　　そういえば、聖。　お前、その体、不具合は無いか？」

聖「不具合？　いや、今のところは特にないぞ？」

神「そうか。これでひとまず一安心だな。…「星座」、か…厄介な奴らが脱獄したもんだ。」

聖「その「星座」ってのはなんなんだ？ さっきは聞けなかったからな。」

神「昔、天界には？最高神？と呼ばれていた三人の神がいたんだ。

その？最高神？の側近についていたのが当時最強だった奴らで結成された組織、それが「星座」だ。「双子座」はその中の1人だ。「双子座」は、ああ見えてあの中では1、2を争う程の強さを持っている。」

聖「ちょっとまで。「1人」…？」

神「そついやおまえ、あいつの本当の姿を知らなかったんだつたな。この際だから、教えておくか。」

聖「あいつらはなんなんだ？ 同じ攻撃に苦戦させられたぞ。」

神「あいつら、「双子座」は元々、一人の人だ。これはあいつらが「双子座」と呼ばれる由来なんだがな。」

聖「まさかとは思うが、そいつは…二人に別れたのか？」



神「嗚呼。 そいつは生まれたときからずっとそうだったんだ。」

聖「……………」

神「どうした？」

聖「…おもしれえ…次は絶対に負けねえ!!!!」

神「はあ…バトルマニアめ」

聖「かまわないさ。」

神「今日はもう寝ろ。 明日はこの街を見て回るといいぞ。」

聖「嗚呼。 わかった。」

神「そうそう、こっちでの俺の名前は千春だ。 覚えやすいだろ？  
無蔵千春。」

聖「…それ、最高神の命令か？」

千春「嗚呼、そうだけど？」

聖「おまえ、なにも知らされてないのかよ？」

千春「なんのことだ？」

聖「…千春は…俺の父親なんだ。」

千春「…！」

聖「千春は…優しくかった。 だけど、いや、だからこそ壊れたんだ。  
でも、俺はそんな千春だったからこそ好きだったんだ。」

千春「…だったら…お前は今まで通りにすればいい。」

聖「…千春…？」

俺はいつの間にか千春に聞き返していた。

千春「だから、さ。 お前は俺をお前の父親だと思えばいいんだよ。」

聖「千春を…父親と？」

千春「嗚呼。」

聖「……………」

千春「…返事はいつでもいい。 お前のタイミングで返事をくれ。」

聖「…わかった…」

俺は小さくそう呟いた。

千春「おやすみ。」

聖「…おやすみ…」

俺は階段をあがって自分の部屋に入った。

知らなかったわけじゃない。  
だけど、知っていたわけでもない。  
でも、いや、だからこそ、俺は言ってしまったのかもしれない。

千春「…父親、か…」

その後、俺は激しい睡魔に襲われて眠った。

その後、俺は全然眠れなかった。

聖「…父さん…助けてくれよ…俺は…どうしたらいいんだよ…父さん…」

俺は悲しみの渦に徐々に飲まれていった…

聖「…誰なんだ…キミは…？」

いつしか俺は聞こえてきた声に聞き返していた。

>…助けて…誰か…助けてください…<

その声が聞こえた後、俺は不思議な？映像<sup>ヴィジョン</sup>を見た。

聖>…！これは…<

その？映像？は黒い塊の様なものが小さな動物を襲っている？映像？だった。

聖>この黒い塊…（嫌に強いちからを感じる…なんだ？これは…？）<

その黒い塊はかなりのスピードでその小さな動物に向かっていた。

聖>助けにいかないと！！<

俺は急いで準備を整えた。

すると？映像？がいきなり消えた。

聖「今の…は…一体…：まあ、いいか…早くいかないと…：！」

俺は急いで家から飛び出した。

聖「なんだってこんな森の中に…：！！！」

俺は森を急いで走っていた。

聖「…：！！ あつちか！」

俺はかすかな音を聞いてその音の場所に走った。

聖「…：いた！」

ちらちらしばらく走っているとやっと見つけた。

聖「？映像？で見たときより数が多い？！」

？映像？で見たときより数が約二倍になっていた。

それに白い制服を着た女の子がいる。

聖「とりあえず、と」

近くにいた黒い塊に向かって、

聖「？虎砲？！！！」

俺は全身にちからを込めた一撃で黒い塊の心臓近くを突き抜いた。

>ギヤオオオウウウ！！？<

黒い塊は吹っ飛んだ。

そして「しゅん」と光になって消えた。

聖「…はっ？ マジかよ…まさか…半分以上分身なのか…？」

とりあえず言っておこう。

数が多い！！

聖「仕方ないか…いくぞ！！」

俺は黒い塊を蹴散らしながら、白い制服の女の子に近づいていった。

聖「？虎砲？！！！！」

>ギヤオオオウウウ！！！！<

大体二十体位倒したのにまだまだ沢山いる。

聖「？紫電？！！！！」

俺は黒い塊に上段の回し蹴りを放ち直ぐ様空中で軌道を下方に変えて蹴り跳ばした。



>ギャン！！！！！<

最後の一体を倒してその女の子に近づいた。

聖「大丈夫かい？」

\*「は、はい。大丈夫です。」

\*>貴方は一体…<

聖「フェレットが…喋った？ とりあえず君たち、名前は？」

俺は周りの黒い塊を蹴り跳ばしながら聞いた。

\*「高町なのはです。」

\*>ユーノです。ユーノ・スクライア<

聖「なのはにユーノか。俺は無蔵聖だ。」

また黒い塊を蹴り跳ばした。

聖「つたく！ 数が多い！」

ユーノ「よくアレを蹴り跳ばせませぬ…」

聖「そうか？ とりあえず時間を稼ぐから君たちはやることをやれ。」

なのは、ユーノ「はい！」

聖「さて、と…」

「グリアアアアアアアア！…」

俺に向かってきた黒い塊を

聖「？虎砲？！…！」

>ギヤオン!!!!<

?虎砲?で吹っ飛ばした。

聖「あいつらの準備が終わるまで…俺が相手してやるよ!!!!」

>グルルル…<

聖「…はっ?なんだ?これ?」

俺の右腕の肘から手首にかけてに鎖がいくつも巻き付けられていた。

そして鎖の周りに黒い玉が舞っていた。

聖「さっきまでなっ…なかつたよな…?」

鎖が巻き付いてるのに関わらず全然重さを感じない。

聖「…試してみるか」

試しに俺は右手を横に降ってみた。

聖「おっ」

面白いことに黒い玉は黒い塊の周りをグルグルと回り、黒い塊の動きを封じた。

聖「『弾ける』！」

俺が『弾ける』と言った瞬間、右手の黒い玉が全て弾けて俺の周りを高速で回転し始めた。

聖「盾か。」

近づいてきた黒い塊を全て弾き跳ばした。

聖「そっいえば……」

俺は左腕の痛みがなくなった事に気付き、包帯を外してみた。

聖「……なんで？」

左手も右手と同じようになっていた。

今のところ違うのは色だけだ。

聖「？虎砲？！！！」

？虎砲？を撃って始めて気づいた。

この鎖は伸縮自在で？虎砲？を撃ち込む直前、相手を逃がさないように絡めとる。

聖「鎖も主に拘束がメインか。」

ドオウツ！！！！

聖「やっと完了か。」

俺は後ろを振り向き光を見た。

その光は桜色をしていた。

聖「……………」

俺は無言で刀を抜いた。

ガチャン！！！！

>！！？<

俺は両手の鎖を使って黒い塊の？本体？を捕らえた。

聖「来いっ！！！！」

ぐいっ！！！！

俺は鎖を引いてこっちに黒い塊を引き寄せて…

ズバン！！！！

すれ違い様に切り裂いた。

聖「後は任せたよ。なのは。」

なのは「はい！」

キイイイイイン！！！！

光が収まった。

聖「はあっ・・・疲れたあ・・・」

俺は刀をしまいながら地面に座りこんだ。

なのは「だ、大丈夫ですか？ 聖さん？」

聖「なのは…俺は同じ年の女の子にさん付けで呼ばれる筋合いはないぞ…」

なのは「えっ！？ 同い年！？」

やっぱり驚くか…

聖「とりあえず俺の家に行こう。俺の家のほうが近い。」

なのは「うん。」

俺となのは俺の家に急いで走った。



…3…

聖「さっきの青い宝石、なんて言うんだ？」

ユーノ「はい。あれはロストロギア、ジュエルシードと呼ばれているものです。」

聖「なのは、ジュエルシードを見せてくれないか？」

なのは「うん。」

俺はなのはから青い宝石、ジュエルシードを受け取った。

聖「見た目は綺麗な宝石なのになあ。これにそんな力があるだなんてなあ…あんまり信じられない話だな。」

俺はジュエルシードを眺めていた。

ユーノ「うーん…」

なのは「そういえばユーノくんはどこに住まわせてあげればいいんだろう?」

聖「それだったら、俺の家にしろ。俺の家には色々と問題点があることだしな。」

ユーノ「あ、はい。よろしくお願いします。えっと、聖?」

聖「嗚呼。」

ユーノ「よろしくお願いします。 聖」

聖「嗚呼、よろしくな。ユーノ。」

なのは「ごめんね聖くん。」

突然なのはが謝ってきた。

聖「家に泊める話しか? 大丈夫だろ? お前の家に連絡して明日が休みだから止まらせてくれて言われたんだからさ。」

なのは「それはそうだけど…」

聖「だから気にしないでいいよ。」

なのは「うん…」

少しだけ不機嫌そうに頷いた。

さて…

聖「後はなのはの寝る場所か…」

なのは「あ、私はどこでもいいよ。 ちょうど聖くんの部屋にソファーがあるからそこに寝るよ。」

聖「いや、ダメだ。 お前はベッドに寝ろ。」

なのは「え？ ええっ！！？////」

聖「なのは？ どうしたんだ？」

なのは「だだだ、だって聖くんのベッドでしょ！！？ 私はよそ者だし…それに、それに…」

聖「ただたんに俺が他人をソファーとかに寝かせたくないだけ。俺はいいから、なのははベッドで寝てくれ。」

なのは「う、うん…」

無理やりなのはを納得させた。

聖「ユーノはなのはと一緒に寝てくれ。万が一があったときのためにな。」

ユーノ「うん。わかった。く」

なんだかんだで今日はもう寝ることにした。

千春「今日は厄日か…？」

いきなり聖が家に殴り込んでくるし、高町なのはとユーノ・スクラ  
イアを連れてくるし…はあ…

千春「やっぱり厄日か…？」

もう一度俺はため息をついて、眠った。

\* (聖…)

聖 (懐かしい…声…?)

俺は夢の中で目を覚ました。

\* (悪いな。 お前の眠りを妨げちまって)

聖 (…俺を夜に眠らせてくれるやつはいないのか…)

\* (悪いってば。それより、お前から不思議な力を感じる。何かしたか?)

聖 (なにもしてないよ。千春 (父さん) (こそ、どうして夢の中に?) )

千春は頭をポリポリと書きながら、話始めた。

千春 (その、さ…なんて言うか、その…すまなかった)

聖 (なんであやまんのさ? あやまんのは、むしろ俺だろ? なんて千春が…謝るんだよ…)

千春 (多分、俺がお前に『陸奥圓明流』を教えたからこうなったんだ。本当にすまなかった。)

そんなことはないよ  
聖

千春 (そうか…安心したよ。)

千春はどんどん消えていった。

聖（次も会えるの？）

わからない  
千春

聖（そっか。じゃあね、おやすみ。千春）

千春（嗚呼。おやすみ、聖。）

千春は消えた。

そして俺の意識も消えていった。

聖「……………」

俺は目が覚めた。

聖「父さん……」

俺は少しだけ外に出ることにした。

外は優しく涼しい風が吹き抜けていた。

聖「……………」

俺は空を見上げていた。

聖「星が…綺麗だ…」

沢山の星が綺麗に輝いていた。

聖「……………」

俺はしばらく歩くことにした。

聖「ん、公園…か」

少し考えていたせいか、いつの間にか公園に来ていた事に気づかな



かった。

聖「少しだけ…」

俺は握りこぶしを右手に作り、地面を叩いた。

すると黒い鎖がいくつも巻き付きながら巨大な一本の柱になった。

聖「案外でかいな」

俺は構えた。

聖「？虎砲?!?!」

ドンツツツ!!!

かなりの衝撃が体を突き抜けていった。

聖「ツツツ…!!!」  
けど、かなりの強度だな。  
けっっこうな盾に  
なりそうだ。」

もう一度構えて…

聖「？無空波?!?!」

バキイイイイイン!!!!

ジイイイイン…

聖「いつてえ!!! なるほど…強ければ強いほど強度が増すのか。」

柱には傷一つついてなかった。

聖「この鉄球…なんか使い道が無いな。 あ、そうだ。」

俺は考えを実行した。

まず、鉄球を目の前に複数展開させる。

そしてそれを…

聖「？虎砲？！！！！」

ガガガガン！！！！

？虎砲？または？無空波？でぶつたたく。

ギューーーン！！！！

ズガガガガガ！！！！

聖「あ、これ、案外使えるな。」

その後は柱を消して色々試してみた結果・・・

聖「まずわかったのが、鎖は伸縮自在でどこからでも出せてしかも無限増殖。鉄球は自在に形を変えてそのうえ、どこからでも出せて無限増殖可能。このくらいかな？」

俺はそろそろ家に帰らないと駄目だったから、家に帰ることにした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8536z/>

---

魔法少女リリカルなのは 魔法少女と転生者

2012年1月6日21時50分発行